

ナチュラルキス  
新婚編 6

*Saboko & Keisbi*

---

風

*fuu*

*ternity*



エタニティ文庫

## Contents

ナチュラルキス ～新婚編6～	5
書き下ろし番外編 バレンタインリベンジ	339

ナチュラルキス  
～新婚編 6～

1 そのうえでの大丈夫 〔沙帆子〕

車の後部座席に座った佐原沙帆子は、雨の風景を見るともなしに見つめていた。今日は終業式だ。この一年間、仲の良い飯沢千里や江藤詩織と同じクラスになれて、とても楽しかった。けれど、このクラスも今日が最後だ。

さらに、両親の引越しも、目前に迫っていてどうにも切ない。

胸がもどかしい感じで疼き、沙帆子は運転している夫の啓史にそっと視線を向けた。やっぱりカッコイイなあ。それに、いつだって隙がない感じ。

本当にわたし、ずっと憧れていた先生と結婚したんだなあ。なんかいまだに信じられないよ。

果樹園の家に到着する頃には、雨は土砂降りになってしまっていた。この家は、啓史の伯父夫婦が以前住んでいたもので、学校のすぐ側の果樹園の中にある。

「まだ学校に行くまでには時間があるし、雨脚が弱くなるまで待とう」

啓史は首を後ろに回して、後部座席の沙帆子に言う。

「そうですね」

答えた沙帆子は、窓に顔を寄せるようにして外を眺めた。

「ほんとよく降るな。明日は晴れるといいんだが」

明日かあ……明日はパパとママの引越しの日だ。

「ほんと、晴れてくれるといいんですけど」

父の幸弘が遠方に転勤することになり、長年住み続けたアパートを引越すことになった。沙帆子が生まれてからずっと暮らしてきた場所。そこが自分の場所ではなくなると思うと、やっぱり泣きたくなる。

「引越しのことを考えてるのか？」

啓史が気遣うように尋ねてきた。沙帆子は彼に顔を向け、こくりと頷く。

ママが言つたみたいに、あれもこれもは選べないんだよね。両親が遠くに行ってしまうのは寂しいけど、わたしの側には先生がいてくれる。

沙帆子は胸がいっぱいになりながら、「大丈夫です」と答えた。思ったより落ち着いた声が出せたことに安心する。

「そうか」

じつと瞳を覗き込まれ、照れくさくなってきた沙帆子は、また車の外に目を向けた。

「あつ、少し小降りになってきたみたいですよ」

そう言って、傘を手にドアを開けようとする時、啓史に「ちょっと待て」と止められた。「俺が先に降りる。そっちに回るから、そこで待ってる」

「えっ？ は、はい……わかりました」

啓史は傘を差しして車を降り、後部座席に回ってくる。そして、傘を差しかけつつドアを開けてくれた。

「降りるとき、足元に気をつけろよ。雨で地面がかなりぬかるんでる」

「わ、わかりました」

うわーっ、こんな風に氣遣ってもらえるなんて。こういうシチュエーションは乙女の夢だ。それを先生にしてもらえとは……嬉しくてどうしていいかわからない。沙帆子は締めまりのない顔で通学鞆と傘を手にする時と車を降りた。

「先生、ありがとうございます」

感激してお礼を言ったら、啓史は「ああ」とぶっきら棒に答え、車のドアを閉めた。

ふふっ。先生、なんか照れてるみたい。

沙帆子は啓史に寄り添い、ひとつの傘で玄関へ向かった。沙帆子が濡れないように氣遣ってくれてるのがわかって、なんともしあわせな心持ちになる。ハートは桃色のドキドキ状態だ。雨も悪くない、なんて思ってしまう。

玄関に入り、洗面所に向かおうとする。沙帆子は用心のため、私服に濃い化粧をして

ここまで来ていた。まずは化粧を落とし、制服に着替えなければならぬ。

急いで啓史に背を向けたら、手を掴まれた。

「先生？」

啓史は何も言わず、沙帆子に顔を近づけてきた。ドキッとした瞬間、ふたりの唇が触れ合う。

ゆっくりと唇を離れた啓史は、真っ赤に染まっているだろう沙帆子の頬を楽しそうに見つめてくる。照れくささが半端なく、沙帆子はさっと背を向け、階段を駆け上ったのだった。

## 2 満たされる存在 〈啓史〉

「ほんと、よく降りますね」

雨の景色を眺めつつ沙帆子が言う。

化粧を落とし制服に着替えた沙帆子は、ダイニングの椅子にちよこんと腰かけて、両手でコーヒーカーップを包んでいた。

沙帆子の向かいに座りコーヒートを味わっていた啓史も、窓に目を向けた。

「そうだな。この時期は、ひと雨降るごとに暖かくなっていくな」  
 今日日は終業式。こいつが高校二年生でいるのも、今日限りか。来月、ようやく三年生になるんだな。

沙帆子が高校を卒業するまで、あと一年……

彼女が卒業すれば、ふたりの結婚を隠す必要もなくなる。だが、高校生の沙帆子を、もう一年側で見ていられるのは、啓史にとってしあわせなことでもあるのだ。

そんなことを思い、口元に笑みを浮かべた啓史とは逆に、目の前にいる沙帆子はどこか浮かない顔をしている。

もしかして、明日の引越しのことを考えているのか？

少しずつ気持ちに折り合いを付けている沙帆子だが、そう簡単には受け入れられないだろうな。引越しが終われば、気持ちも落ち着くんだろうが……

「沙帆子」

呼びかけたら、沙帆子は「はい」と顔を上げる。

「どうした？」

「あ……」

沙帆子は一声発して黙り込んだが、すぐに口を開いた。

「千里や詩織と一緒にのクラスも今日までかもしれないと思うと……寂しくて」

そうか……こいつの心をかき乱しているのは、引越しのことだけじゃないんだな。飯沢と江藤は、沙帆子の親しい友人だ。あのふたりとクラスが離れてしまうのは残念だろう。クラスメイト次第で、学校生活はがらりと変わるものだからな。

俺としても、結婚の事情を知るふたりが、来年度も沙帆子の側についてフォローしてくれたら心強いのだが……なかなか、希望通りにはいかないよな。

そろそろ時間になり、果樹園の家を先に出ることにした啓史は、玄関で靴を履いた。一緒に行動して、いつ誰に目撃されるとも限らない。そのため、用心して別々に家を出ることにしたのだ。

沙帆子が無事に卒業させるには、ふたりの関係は絶対に知られてはならない。つい先日、沙帆子の着ていたセーターが啓史のものに似ていると気づいた女生徒がいて、その後、沙帆子が啓史の結婚相手ではないかという噂が立った。騒ぎになることはなかったが、この事態を軽んじることはできない。ふたりの生活を守るためには用心しすぎるくらいでちょうどいいのだ。

沙帆子に見送られ、果樹園の家を出る。啓史は雨の中を歩きながら、傘越しに分厚い雲のかかった空を見上げた。まだまだ雨は降り続きそうだ。

終業式が終わったら、沙帆子は彼女の両親のアパートへ行くことになっている。それ

までにこの雨がやんでくれればいいんだが……  
 そんなことを考えながら学校へ向かっていると、携帯に電話がかかってきた。相手を確認すると、学校長で伯父の橘広勝からだ。

そこでふと数日前にも広勝から電話がかかってきたことを思い出し、啓史は思わず顔をしかめた。

あのときは、電話に出るなり急いで来いと言われ、啓史の結婚相手が沙帆子だとバレたのではないかとずいぶん肝を冷やした。

「伯父さん、何かありましたか？」

「ああ、啓史。お前もう学校か？ 話があるんだ。ちょっと校長室に顔を出してくれんか？」

電話口の様子から考えると、火急の用ではないらしい。啓史は了承して電話を切った。そうだ。俺の車に積み込んでる沙帆子の荷物も、忘れずに伯父さんに頼まなきゃな。

表向き、沙帆子は新学期より広勝の家を下宿するということになっている。そのため、広勝の家にも沙帆子の部屋を用意することになった。それで、よりそれらしくするため、沙帆子の荷物を置くことにしたのだ。

啓史が教職員の玄関を入ると、そこには身体を屈めて靴を履き替えている女性が見えた。見覚えのない女性ではあったが、一応「おはようございます」と声をかけ、自分も

靴を履き替える。

「おはよう……ございます」

ずいぶんと覇気のない返事に、啓史はちらりと相手を振り返った。

窺うようにこちらを見ている女性と目が合ったが、やはりその顔に見覚えはない。

外部の人間か？

見知らぬ女性は、なぜかむつつりとしてその場を去った。

なんとなく気になり、その後ろ姿を目で追うと、彼女は迷わず職員室へ行って行った。学校には外部の人間がやってくることもあるし、気にすることでもないだろう。啓史は深く考えることなく、校長室に向かった。

「校長先生、話というのは？」

校長室に入っただけで、啓史は広勝に尋ねた。

「まあ、座って話そう」

ソファへと促され、広勝と向かい合って座る。

「あまりいい話じゃないんだが……」

「それって、俺とあいつのことじゃないよね？」

「ああ、違う。入院中の物理教諭のことなんだ」

なんだ、そのことか……

つい先日、物理の教諭が複雑骨折で入院した。退院まで二ヶ月かかるようで、新学期には間に合わないらしい。そこで、臨時の物理教諭が見つからなかった場合、啓史たち理科系科目を受け持つ教諭がしばらくその穴を埋めることになっている。

「代理の教諭が見つからないわけ？」

「いや……まあ、それもそうなんだが……。実は、彼が骨折した理由が大問題でな……」  
ずいぶん口にしづらそうだが……

「伯父さん。時間もないし、簡潔に話してくれないかな」

そう催促したら、広勝はため息をついたのち、今度は口ごもることなく話してくれた。広勝から話を聞き終えた啓史は、呆れて言葉が出なかった。

なんと物理教諭が骨折した理由は、既婚女性との不倫がその夫にバレそうになって、窓から飛び降りたからなのだそうだ。おまけに、その既婚女性はこの学校の教諭だという。それにしても、あの物理教諭はバケ子女史に熱を入れていたと思っていたのだが？

広勝にそう聞いてみると、「不倫がバレないためのカムフラージュだったんじゃないか」と言う。

それはともかく、こうして事が公になったことで、物理教諭は辞表を提出してきたという。そして、不倫相手の女性教諭もまた、辞表を出してきたらしい。

「伯父さん、大変なことになったじゃないか」

「ああ、だからこうして頭を抱えとるんだ」

広勝は慥然として言う。物理教諭が入院中の二ヶ月間をなんとか皆で乗り切ろうと思っていた矢先に、ふたりも教諭を失ったのだ。大変どころの話ではない。

「現実問題として……どうするつもりだい？ 何か当てるはあるの？」

「当てるはなくても、なんとかするしかないだろう」

「確かに。それで、辞表を出した女性教諭の担当科目はなんなの？」

「英語だ」

「えっ？」

思わず声を上げてしまふ。英語といえばバケ子女史と同じ科目。これは嫌な予感しかない。

「こうなったら、としや篩谷先生を本採用にするしかない。それで産休明けのふるや古谷先生には、もう最初からフルタイムで働いてもらおう」

案の定、広勝がそんなことを言い出し、思わず顔が歪む。

篩谷というのはバケ子女史のことだ。化粧が濃いせいでバケ子というのが通称になっている。啓史はこれまで、彼女のしつこいアプローチにかなり悩まされてきた。

つい先日、産休の古谷先生が戻ってくる代わりに、臨時教諭の篩谷先生が辞めるといふ朗報を聞いたばかりだったのに……



「まったく、参ったなあ」

疲れた顔で愚痴を零す広勝を見て、心配になる。ここは少しでも元気づけてやりたいが。「伯父さん、俺も力になるよ。いまは、これからどうするかを考えるほうが先じゃないかな」

「もつともだな。だが、お前の前でくらい、愚痴のひとつも言わせてくれ」

そう言われてしまい、啓史は苦笑いした。元気づけるつもりが……

正直、俺としては篩谷先生が本採用になるというのはありがたいがたくない。けれど現実的に考えれば、彼女を本採用にするのが一番だろうな。

「伯父さん」

「うん」

「伯父さんの考える通りでいいんじゃないか。バケ……篩谷先生を本採用にして、古谷先生には悪いけど、最初からフルタイムで働いてもらうしかない」

「そう……だな。物理教諭も引き続き探さなければならなくなった。化学のお前と生物教諭のふたりで、物理を掛け持ちし続けるなんて、さすがに無理だから」

「ああ。なんとか探し……」

話の途中でドアをノックする音がし、啓史は口を閉じた。広勝が「はい」と返事をする。「すみません。篩谷ですが、入ってもよろしいでしょうか？」

啓史は思わず広勝と目を合わせた。

噂をすればというやつか？

広勝が職員室に続いているドアを指さす。そっちのドアから出ると言うのだろう。

篩谷と顔を合わせたくない啓史は、素早く移動して校長室を出た。

職員室に入ると、いつになくざわついていた。いま広勝から聞いた話がすでにみんなの耳にも入っているのに違いない。

……けど、他人事じゃなよな。俺と沙帆子のがバレたら、もつと騒ぎは大きいだろう。

啓史は複雑な心境で、ため息をついたのだった。

### 3 楽しい企画 〈沙帆子〉

「なんか胸がシクシクするよお」

情けない声で詩織が言う。

終業式を終えた三人は、教室に向かって歩いていくところだ。教室に戻る生徒たちの行列の中心にいて、沙帆子もなんととも言えない切ない気分にとらわれていた。

「天気もよくないし、テンションは下がる一方だよ」  
止まらない詩織の愚痴に、並んで歩く千里が呆れたように口を開く。  
「そう暗くならないの。まだ三年でクラスがバラバラになると決まったわけじゃないんだよ」

「でも……三人一緒ってのは、きつと無理だよお」

詩織の言葉に千里が黙り込む。その反応を見た詩織は、さらにしよげ返った。

「いっそ、ずっと二年生でいたーい」

「何を馬鹿なこと言ってるのよ」

「馬鹿なことじゃないもん。それくらいシツゼツなの」

「シツゼツって何？」

「えっ？ シツ……あれっ？ サツジツ？ ……シー、スーツゼツ、ジツ？ セーツジツ、ソーツ」

「あっ！ それじゃないの？」

千里が叫ぶ。詩織は眉を寄せ、「ソツゼツ？」と言う。

「ちがーう。セツジツよ、切実！」

「ああ、そっかー、切実だったよ。切実なんだよ」

すっきりした顔で声高に言う詩織の額を、千里はペチンと叩いた。

「周りに笑われてるわよ」

「へっ？」

詩織は慌てて周囲を見回し、顔を赤らめた。

そんなふたりのやりとりを眺め、沙帆子はくすくす笑う。

楽しいけど……楽しい分だけ、やっぱり切ないなあ。

教室に戻り、全員が自分の席に着く。みんなどこかそわそわしているようだ。

すると、おもむろにクラス委員が立ち上がった。

「なあ、みんな。このままこのクラスがバラバラになるの、すっげえ残念なんだけど……」

「だよなあ。俺もそう思う」

クラスのムードメーカーでもある天野が、真っ先に手を挙げて同意する。

「なんかやりたいよな。春休みに全員で山に登るとかさ」

天野の提案に、沙帆子は眉を寄せた。このクラス全員で最後に何かやるというのは大いに賛成なのだが、参加するのは難しそうだ。

春休みに入ってからすぐ、両親の引越先について行くことになっている。それに、こちらに戻ってきてからも、色々と予定が入っていた。

いまから丸一日予定を空けるとするのは、さすがに無理かも。

「ねえ、やるのなら、もっと簡単なことにしない？」

まるで沙帆子の気持ち<sup>く</sup>を汲んだかのように、千里がそんな提案をする。

「簡単なこと？」

「ええ。ちょうど桜の咲く時期なんだし、お弁当を用意して、校庭でお花見するとか」

「花見か。いいな。でも、校庭？ 校庭に花見ができるほど桜<sup>つ</sup>って咲いてたっけ？」

「それが花見に最適な場所があるの」

へーっ、この校内に、そんな場所があるんだ。

「あ、あの……熊谷先生と佐原先生も誘ってみたらどうかしら？」

女生徒の中から、おずおずとそんな提案が出され、途端にみんなが色めき立つ。

「あーっ、それいいな」

次々に賛成の手が挙がる。沙帆子も手を挙げながら、内心ドキドキしてきた。もしそれが実現したら、最高に楽しい。

「三月だと、まだ桜が咲いていないかもしれないし、春休みが終わる直前くらいがいいと思うんだけど……そうね。七日くらいが妥当かしら？ どう、その日では無理だっけ子はある？」

千里がクラスの人々に尋ねる。始業式直前なら、なんとか都合がつけられるかも。千里、きつとわたしのために、その日を提案してくれたんだろうな。

どちらにしても、佐原先生に聞いてみないと、参加できるかわからないけど……

「まあ、みんな色々都合があるだろうから、全員参加は無理かもしれないけど……無理強い<sup>じ</sup>はしないってことで、いい？」

千里の提案に納得し、それぞれが了承の返事をする。そうして、花見の計画が着々と進められた。

みんなが計画に夢中になっているところで、担任の熊谷がやって来る。すると、まるで打ち合わせていたように全員が神妙な面持ち<sup>おも</sup>で姿勢を正した。

教室に入って来た熊谷は、足を止めて眉を上げる。

「なんだ？ お前たち、今日はずいぶんと行儀がいいじゃないか？」

熊谷はみんなをからかいつつ教卓に向かう。そんな熊谷のあとに啓史が入ってきて、沙帆子は驚いた。さ、佐原先生、来てくれたんだ。

「このクラスも今日が最後だからな。副担任の佐原先生にも来てもらった」

そうか……このクラスになった最初の日も、副担任として佐原先生がやって来たんだっただった。

あのときはもう、喜びやら緊張やらで、心臓が破裂しちやいそうだったなあ。

「先生、ちょうどよかったですよ」

クラス委員は嬉しそうに声を上げ、花見について説明する。その間、沙帆子は啓史を

ちらちら窺<sup>うかが</sup>った。彼の返事が気になる。

啓史は表情を変えずに話を聞いていたが、すっと視線を動かした。ハツとした一瞬、ふたりの目が合い、心臓がバクンと跳ねる。

あっ、あーっ、びっくりした！

「花見か、いいな。それで、いつやるんだ？」

熊谷の前向きな発言に、クラス委員はテンションを上げて説明し、彼の参加を取り付けた。

すると熊谷が、「佐原先生はどうです？」と隣の啓史へ聞く。

「来月の七日なら、参加させてもらおうかな」

啓史のその返事を聞いた瞬間、教室内に歓声が沸き上がる。

もちろん沙帆子も、他の生徒同様に飛び上がって喜んだのだった。

#### 4 ようやく実感（啓史）

こいつらと花見か……すこぶる健全な花見になりそうだな。

以前、友人たちに強引に連れて行かれた花見を思い出し、顔が歪<sup>ゆが</sup>みそうになる。男ば

かりで愉快ではあったが、酔い潰れる奴が多くてあとが大変だった。

それにしても、啓史が参加すると言った途端、クラス全員が大騒ぎしている。その中には沙帆子もいるわけで……彼女のはしゃぎっぷりに、笑いが込み上げてきてしまう。

どうやら、参加することにしてよかったみたいだな。春休みは色々と予定が詰まっているが、このクラス最後の行事を沙帆子と一緒に楽しめるのは俺としても嬉しい。

最後のホームルームは、花見の予定が決まったからか、さほどこんみりせず進んでいった。

その様子を眺めながら、啓史は去年の始業式で初めてこのクラスの生徒たちと対面したときのことを思い出す。そして、いささか後ろめたい思いに駆られた。あのとときの俺は、沙帆子のことばかり気にしていたんだよな。副担任として、クラス全員に目を向けるべきところなのに、まるきり生徒たちを見ていなかった。

「それじゃ、佐原先生からもひと言」

過去を思い出してひとり反省していたら、急に熊谷に話を振られた。

ひと言か……

「それでは……このクラスの副担任として一年過<sup>ご</sup>ごさせてもらい、たくさんのことを経験させてもらった。授業だけでなく、体育祭や文化祭、そしてこの間のレクリエーション大会と一緒に参加できて……クラスがひとつになる感覚というか、学生の時分にしか

味わえない特別な感覚を、また味わわせてもらえた。本当にありがとう」

啓史はクラスの生徒たちに向かって頭を下げた。そうして顔を上げると、クラス全員が啓史をまつすぐに見つめている。沙帆子までも。

静まり返った空気が照れくさくなり、啓史は「ひと言じゃなかったな」と冗談まじりに口にし、照れを誤魔化<sup>ごまか</sup>した。すると、おもむろに天野が立ち上がる。

「佐原先生が副担任で、すっごい嬉しかったです！」

そう言ったあと、天野は「あっ、もちろん熊谷先生もですけど」と焦って付け加えた。「なんだ、俺はおまけみたいだな？」

熊谷が不服そうに言うのと、天野だけでなく、ほかの生徒たちも慌<sup>わろ</sup>て出した。

「そつ、そんなことないですよ。熊谷先生あつての二組でした」

啓史は口元に拳<sup>こぶし</sup>を当て、くっくつと声を上げて笑った。熊谷が最高の担任だったことは、クラス全員がわかっていることだ。

できることなら、俺もまた熊谷先生のクラスの副担任にしてもらいたいくらいだ。

生徒たちの慌てっぷりに、熊谷が笑い出し、いい雰囲気の中、ホームルームは終了した。

「なんとも切ないな」

二組の教室を出てすぐ、熊谷がぼつりと零<sup>こぼ</sup>す。

「熊谷先生？」

「生徒たちもこの日は寂しいんだろうが……担任も同じだよ」

「……ええ。寂しいものですね」

そう口にしながらか、啓史は自然と笑みを浮かべていた。

俺はやっと、徹<sup>てつ</sup>兄<sup>あに</sup>と同じ思いを味わえたんだな。

教師である兄の徹<sup>てつ</sup>が、初めて担任を受け持ったのは中学三年の沙帆子のクラスだった。沙帆子たちが卒業するとき、徹は感傷に駆られ、『教師なんてなるもんじゃないぞ』なんて言っていた。

「担任は、親のように見守ってきた生徒たちを必ず一年で手放すことになる。そうして四月になり、また一年同じことを繰り返すんだが……毎年終業式は、特別切ない」

「ええ。そうですね。ですが熊谷先生、私はこの思いを経験できて嬉しいんです」

「嬉しい？」

「はい。実のところ、元々私は教師になるつもりはなかったんです。けど、教師の兄を見ていて……自分も兄のような経験がしてみたいと思いました。それで教師になったんです。だから、かつて兄の経験した寂しさを、こうして実感できて嬉しいんですよ」

「……そうだったのか。いや、いい話を聞かせてもらった。そうか……この思いを味わうのは、しあわせなことなんだな」

熊谷はしみじみと言い、啓史に向かって微笑んだ。

「佐原先生、ありがとう。気持ちが少し楽になったよ」

「とんでもありません。……それに、熊谷先生がそういう気持ちに駆られているのは、生徒たちを一心に育はぐんでこられたからこそですよ。私はこの一年、熊谷先生に教師として必要なことをたくさん学ばせていただきました。ありがとうございました」

啓史は足を止め、熊谷に深々と頭を下げた。

「さ、佐原先生。参ったな」

顔を上げると、照れたように頭を搔く熊谷と目が合って互いに笑い合う。

「花見、楽しみですね」

そう言ったら、熊谷は笑顔で大きく頷うなずいた。

教師になってよかったと、啓史はこれまで以上に強く思ったのだった。

## 5 理屈じゃない納得 ー沙帆子ー

二年生最後のホームルームが終わった。下校すれば、沙帆子の高校二年も終わる。複雑な思いを断ち切るように、沙帆子は鞆を持って立ち上がった。そして、千里の席に歩み寄ると、すぐに詩織もやって来た。

「それじゃ、帰ろうか？」

「うん」

クラスメイトたちは、まだひとりとして教室から出ていないようだ。みんな、教室のあちこちに集まり、先ほど決定した花見のことで盛り上がっている。

でも、それだけじゃなくて、きつとみんなこの教室から出ることに躊躇ためらいを感じているんだと思う。

沙帆子だって同じ気持ちだ。とても去りがたいけど……帰らないと……

三人とも無言で教室を出た。廊下にいる生徒たちも、名残なごりを惜しむみたいにおしゃべりをしている。

「なんか……やっぱ寂しいね」

詩織がぼそりと呟つぶやく。そんな詩織を見て、沙帆子も胸が切なくなつた。

詩織はいま出てきたばかりの教室を振り返る。

「もつと、あそこにはいたかったなあ。千里や沙帆子と一緒に……」

詩織が涙声になり、沙帆子も涙が込み上げてくる。そんなふたりを見て、千里がため息をついた。

「その気持ちはわかるよ。わたしだって同じ気持ちだもの。……だからって留とどまってはいられないからね」

千里の言葉聞き、詩織は不服そうに頬を膨らませる。  
千里の言うことはもつともだ。それでも、できるものなら留まりたいと沙帆子も思っ  
てしまう。この一年、三人一緒のクラスになれて本当に嬉しかった。その幸運に心から  
感謝してる。一緒に過ごした一年がとても楽しかった分、その時間にしがみつきたくな  
るのだ。

「来年も……同じクラスになれたらなあ」

詩織が小声で口にする。

「なれるかもしれないよ」

背後から、突然そんな声をかけられた。沙帆子たちは驚いて後ろを振り返る。

いつの間やら、生徒会長の森沢と、その友人である広澤が立っていた。

「大樹、いつの間に……驚いたじゃない」

千里が森沢に文句を言う。森沢大樹は千里の彼氏だ。

「ごめん、ごめん。なんか君ら深刻そうな雰囲気だったから、声をかけるタイミングが  
掴めなかったんだ」

詩織はいえ、密かに想いを寄せる広澤の登場に顔を赤らめて慌てている。

「いつからいたのよ?」

「いや、追いついたのはたつたいま。江藤さんが『同じクラスになれたらなあ』って言っ

たところから」

千里の問いに森沢が答える。そしてそのまま、みんなで昇降口に向かうことになった。

「榎原さん、明日はご両親の引越しだね」

広澤が話しかけてきて、沙帆子は頷いた。

「ご両親が遠くに行ってしまうのは、さ、寂しいだろうけど、僕らも、ついてるから」

どこかたどたどしく広澤が言うと、千里と森沢が同時に噴き出した。

「うっ! 笑うことないだろう?」

広澤は顔を赤らめて、噴き出したふたりを責める。

「だって……」

「いささかな」

笑っているふたりを、広澤が睨む。

「あの、どういうこと?」

詩織が戸惑ったように声を上げる。だが、沙帆子はだいたいの事情を察した。

実は、森沢と広澤も沙帆子と啓史の関係を知っている。彼らもまた、ふたりの結婚が  
バレないように、色々と親身になってくれていた。その一環で、沙帆子は少し前から広  
澤と付き合っている風を装っている。

いまの広澤の発言も、周囲にそう思わせるためで……たぶん、森沢の描いたシナリオ

ではないだろうか？ 確認するように千里へ視線を向けると、笑いながら頷かれた。

「もおつ、なんなの？ わたしだけのけ者になつてるよね？」

詩織が拗ねたみたいに言うのと、広澤が「後で話してあげるよ」と、極上のスマイルを浮かべる。想いを寄せる相手の微笑みに、詩織は顔を真っ赤にして何度も頷いた。

詩織つてば、ほんと可愛すぎ！

「君は、新学期から校長先生の家に下宿するんだろ？」

今度は森沢から尋ねられ、沙帆子は「ええ」と答える。どうやらシナリオはまだ続くらしい。廊下には大勢生徒が残っている。中には、自然とこの会話を耳にする子もいるだろう。

ほんと、色々考えてくれてるよね。感謝しないと。

「でも、あのアパートを引き払うのは寂しいよね？ わたしだって寂しいもの」

千里がしんみりそう言うと、詩織もうんうんと頷く。

「わたしも、何度もお泊まりさせてもらった沙帆子の部屋がなくなるのかと思うと、すごい寂しい。それに芙美子ママの絶品おやつもさ……この間、引っ越しの片付けを手伝いに行った日に食べたのが、このアパートで食べる最後のおやつなんだーと思ったら、泣きそうになっちゃったよ」

詩織は唇を突き出し、べそをかく。

「もおつ、あんたがそんなこと言ったら、沙帆子が増えますます辛くなるでしょ！」

「ううっ、……だってえ」

「だってじゃないの！」

千里は詩織の頬を両手で摘まみ、ぐいっと横に引っ張る。

「や、やめへえ」

いつも沙帆子が啓史からやられているいたぶりを目の当たりにし、思わず沙帆子は噴き出してしまった。すると、それにつられて、詩織を除いた全員も笑い出す。

笑われた詩織は初めむっとしていたが、結局自分も笑い出した。

笑いながら、沙帆子の胸には感謝の気持ち湧いてくる。心を通わせ、こうして笑い合える仲間がいることが嬉しくてたまらなかつた。

「あらっ？ ちょっと、沙帆子」

みんなで校門に向かってしていると、千里が何かに気づいた様子で沙帆子に呼びかけてきた。

「あれって、あんたのお祖母ちゃんじゃない？」

千里の言うほうに顔を向けた沙帆子は、驚いて足を止めた。校門のすぐ側で、祖母の美枝子がこちらに向かって手を振っている。



「お祖母ちゃん！」

「ほんとだ。沙帆子のお祖母ちゃんだ」

千里も詩織も、美枝子とは何度か会っている。

「沙帆子のこと、迎えに来てくれたんだね」

詩織に聞かれ、沙帆子は頷いた。

「そうみたい。お祖母ちゃん、引越しの手伝いに来てくれて、昨日はアパートに泊まったの」

沙帆子たちは、美枝子のところへ駆けて行く。森沢と広澤もついて来た。

「お祖母ちゃん、どうしたの？」

「もちろん、さーちゃんを迎えに来たのよ」

「電話してくれば……あつ、もしかして電話くれた？」

沙帆子は慌てて鞆から携帯を取り出す。確認すると美枝子から着信が入っていた。

「ご、ごめん、お祖母ちゃん。サイレントにしたから、気がつかなかった」

「沙帆子ってば、いつもそれなんだから。ちゃんとこまめに確認しないと」

千里からお小言をもらい、しゅんと萎れる。

「ふふ。千里ちゃんは、相変わらずしつかりしてるわねえ」

美枝子が楽しそうに言う。

そのあと、美枝子とみんなのおしゃべりが弾んだ。初対面の森沢や広澤も上手いこと会話に引き込む祖母の話術の巧みに舌を巻いてしまう。笑いが絶えず、沙帆子もたくさん笑った。

「さて、さーちゃん、そろそろ帰りましょうか？ ふーちゃんも待ってるし」

話がひと段落ついたところで、美枝子が沙帆子を促してきた。それに頷いて、沙帆子はみんなに向かつて挨拶する。

ちなみに、ふーちゃんとは、母の美美子のことだ。

「それじゃ、これで」

「うん。沙帆子、明日からしばらく引越し先だもんね。会えない間はメールするよ」

「わたしもメールする」

千里の言葉に続けて、詩織も笑顔でそう言ってくれる。

「うん、わたしもメールするからね」

そう答えて車の助手席に乗り込もうとしたら、詩織が焦って呼び止めてきた。

「あのっ、沙帆子。がっ、頑張るんだよ！」

詩織は沙帆子の手を握り締め、励ますように強く言う。

沙帆子の気持ちを思いやってくれているのが伝わってくる。

「うん、頑張る。ありがとう、詩織」

「うん、うん」と、詩織は二度、三度と頷き、沙帆子の手を名残惜しそうに離した。車に乗り込むと、美枝子はみんなに手を振り、車を発進させる。

沙帆子は、みんなが見えなくなるまでずっと手を振っていた。

「さーちゃんは、いい友達に恵まれてしあわせね」

「うん。わたしもそう思う」

美枝子の言葉に、沙帆子は微笑んで頷いた。

でもよかった。お祖母ちゃん（おばあちゃん）が迎えに来てくれて。本当はこれまでのように電車で帰るのは、ちよつと辛いと思っていたのだ。

駅から家までの道のりが本当にこれで最後なのだと考えてしまつて、絶対泣いていただろう。

「ねえ、お祖母ちゃん。荷物はもう片付いたの？」

「ほほね」

「そう」

思わずしみりとした口調になつてしまう。

「寂しい？」

「それは……寂しいけど……」

そう答えたら、美枝子が「ふふっ」と笑う。

なぜ笑つたのか気になり、沙帆子は運転している祖母に視線を向けた。

「いまの返事で安心したわ」

「えっ？ どうして？」

「『けど』が、ついてたから……。つまり、寂しいだけじゃないってことでしょう？」

「う、うん……そう……かな」

「いくらさーちゃんの側に啓史君がついていてくれても、ずっと住んでいた家がなくなるのも、両親が遠くに引越してしまうのも寂しいことだから……。心配してたの」

その通りだった。沙帆子の中には、言葉にできない寂しさがある。

「でも、あれもこれもは選べないから」

母に言われた言葉を真似て沙帆子は言った。両親について行く選択もあったけれど、沙帆子は啓史との生活を選択したのだから。

「そうね。さーちゃんの選択は間違っていないと、お祖母ちゃんは思うわよ」

「そ、そう？」

「啓史君と会つて、そう思ったわ」

「そうなの？」

「理屈じゃない納得ね」

理屈じゃない納得か……

美枝子の言葉に勇気づけられ、沙帆子は微笑んだ。

## 6 衝撃！ 啓史

ホームルームのあと化学室の隣にある化学準備室に戻ってきた啓史は、さっそく自分の仕事に取りかかった。明日から沙帆子の両親の引越し先について行くのであるべく仕事を終わらせておく必要がある。

もしも、新学期までに物理の教諭が見つからなかった場合、どれだけ期間、物理の授業を掛け持ちすることになるかわからない。できるだけ今のうちに新学期の準備をしておかないと……

そこで啓史は、沙帆子の荷物をまだ広勝に預けていないのを思い出した。

携帯を取り出そうとした啓史は、ふと気が変わって立ち上がった。

息抜きがてら、校長室まで行くことにしよう。

化学準備室を出て廊下を歩いていると、体育教師の金山かなやまが前からやって来るのが見えたと。どうやら啓史のところに来ようとしていたようで、顔を輝かせて手を振ってくる。

これは、なんとなく嫌な予感がするな。

「佐原先生、いま先生の部屋へ行くとところだったんですよ」

「何か、急ぎの用事でも？」

「実はですね、校長先生から頼みごとをされました」

伯父貴やくかいから？ なんだか話が長くなりそうだ。それに厄介事やくかいじに巻き込まれそうな気が、物凄くする。

「すみません。いま急いでいるんですよ」

そう言ってその場を去ろうとしたが、金山の大きな身体で前方を塞ふさがれた。

「話はすぐに終わるんで、ちょっとだけ時間をくださいよお」

両手を合わせて拝まれる。彼の勢いに押され、啓史はため息をついた。

それを了承と取ったのか、金山はすぐに話を切り出してくる。

「実は今朝、篩谷先生が退職願を出してきたらしいんですよ」

は？ 篩谷先生が退職願を出した？

「それで校長先生から、彼女を引き止めてほしいって頼まれたんですよ」

その話を聞きながら、今朝、篩谷が校長室にやって来たことを思い出す。

そうか、あのとき退職願を出したのか。

正直、いままでのことを考えると、彼女がいなくなってくれるのはありがたい。だが、すでに英語教諭がひとり辞めてしまっている。さらにもうひとりなんてことになったら、

来年度の英語の授業は立ちいかなくなる。

自分の気持ちとはかく、ここは生徒たちのことを一番に考えてやらないとな。

「金山先生。それはなんとしてでも、引き止めて来てください」

彼を激励したら、金山は慌ててブンブン両手を振る。

「俺ひとりでなんて、とても無理ですよ！ だから佐原先生にも一緒に行ってもら……」

「お断りします！」

間髪を容れず答える。

「えっ！ 即答ですか？」

「金山先生の引き止めが成功するのを願ってますよ。では、急ぎますので失礼します」

啓史はさっさと歩き出したが、金山は必死になって追いつがってきた。

「お願いしますよお」

啓史は無視して歩くが、金山も諦めない。

まったく参ったな。

「あっ、佐原先生、向こうから篩谷先生が来ますよ」

金山がテンションを上げて言うのを聞いて、危うく『げっ』と叫びそうになる。

啓史は反射的に背を向け、その場から逃げ出そうとした。だが、金山にがっちり押さえ込まれる。

「どこ行くんですか？」

「金山先生、離してください！」

「嫌ですよ。もう観念して協力してください。この通り、頼みますよお  
くそっ！

体育教師の金山の力は半端なく、とても振りほどけそうにない。啓史は諦めて協力するしかなくなった。

「もうわかりましたよ。だから金山先生、離してください」

むっとして言ったら、金山は用心しながら啓史を解放する。

「一度了承した以上、逃げたりしませんよ」

「そうですね。じゃあ、よろしくお願いします」

金山は朗らかに笑う。啓史は疲れた息を吐き、篩谷のほうに目を向けた。

啓史と金山の様子を見ていたのだから……彼女はまっすぐこちらに歩いてくる。

うん？

「金山先生、篩谷先生じゃありませんよ」

「はい？」

啓史の言葉に首を傾げた金山は、「ああ」と納得した声を上げ、「いえいえ、あれは篩谷先生ですよ」と断言する。

あれが篩谷先生？

こちらにやって来る女性は、今朝方、職員玄関で啓史が顔を合わせた相手だ。もちろん、バケ子女史とは似ても似つかない容姿をしている。

「篩谷先生、あの濃い化粧をついにやめたみたいですね。こっちのほうが断然いいですよ」  
濃い化粧をやめた？

啓史は改めて歩いてくる女性を見た。驚いたことに、彼女はまったくの別人に見える。篩谷はバケ子女史とあだ名されるほどの厚化粧をし、服装も髪型もとにかく派手だった。そしてその姿に見合った振る舞いをしていたのだが……いまの彼女は化粧は薄いし、髪も後ろで束ね、ありきたりな紺のパンツスーツを着用している。

「篩谷先生」

金山が呼びかけると、篩谷は無表情のまま足を止めた。

「何か？」

「あの、校長先生から、篩谷先生が退職願を出されたと聞いて」

「……それで？」

「なんとか、残ってもらえないかなあと、説得に」

金山の言葉を聞いていた篩谷の目が、啓史に向けられる。間近で目が合うが、それでも別人にしか見えない。

「佐原先生はなぜここにいらっしやるんです？ あなたがわたしを引き止めに来たとは考えられませんけど」

篩谷は啓史に向かい、皮肉をたっぷり込めて言う。

「本音では、辞めてほしいと思ってるんでしょう？」

化粧だけでなく態度までがらっと変わっていた。そんな篩谷を啓史は見つめ返した。

「ええ。本音では辞めてほしい……いえ、ほしかった、かな。……いまの貴女は、もう俺には興味がなさそうですし」

篩谷がふつと歪んだ笑みを漏らす。そして、けだるげに言葉を続けた。

「もうすべてが馬鹿らしくなったの」

馬鹿らしくなった？

どんな心境の変化があったか知らないが……いま彼女に辞められては困るのだ。

「だから、教師を辞めるんですか？」

「そうよ。いけないかしら？」

なぜか挑戦的な目を向けられる。

さて、どうするか……

そういえば、まわりつかれて困ったという印象が強いが、彼女が仕事を疎かにしたという話は聞かなかったと思ひ出す。

派手な身なりや、その言動に批判的な声は多かったが、こと仕事に関しては真面目に取り組んでいたようだった。

それはつまり、教師という職を好きだということじゃないのか？ だとすれば、辞めることに躊躇いはないのだろうか？ すべてが馬鹿らしくなったと言うが、彼女を引き止められる可能性があるとしたら、その点かもしれないな。

啓史は篩谷に向き合った。

「ひとつ聞かせてくれませんか？」

そう声をかけたら、篩谷はあからさまに顔を歪める。

「佐原先生のほうから、わたしに聞きたいことがあるなんてね。なんか笑えるわ。ぐいぐい迫つてるときには、相手にもされなかったのに……」

厭味<sup>いやみ</sup>つたらしい言葉をスルーし、啓史は単刀直入に問うことにした。

「篩谷先生、貴女はどうして教師になつたんですか？」

「えっ？」

その質問は予想外だつたらしく、篩谷は驚いたように啓史を見る。

「よろしければ聞かせてもらえませんか？」

「どっ、どうして？ どうしてあなたに、そんなこと言わなきゃいけないのっ!!」

何もかもどうでもいいという態度だつた篩谷が、感情も露わにきつく啓史を睨む。

どうやら、先ほどの考えは間違つていなかったらしい。彼女がこうして感情的になつたということは、多少なりとも教師を辞めることに躊躇いがあるということだろう。

「何があつたか知りませんが、本当にこのまま辞めてしまつていいんですか？」

篩谷は両手をきつく握り、わなわなと震えている。

啓史は黙つて彼女の出方を待った。金山はおろおろしてふたりの様子を見ている。

「わかつたようなことを言わないでよ。ほんと、気に入らないわ！ いったい何様のつもりよ！」

「すでに英語教諭がひとり辞めているんですよ。ここで貴女まで辞めてしまつたら、生徒たちはどうなるんです？」

キツと顔を上げた篩谷は、掴みかからんばかりに啓史へ詰め寄り声を荒らげた。

「見た目がいいからつて、調子に乗つてんじゃないわよ。ほんと嫌な奴！」

「とっ、篩谷先生、ちよつと落ち着いて」

慌てて篩谷をなだめようとする金山の肩に、啓史は手をかけた。

「金山先生、いいんです。構いませんから」

「で、ですが……」

「なによ、かっこつけちゃつて！ 言つておきますけどね、こっちは何もかも知つてるんだから！」

何もかも知っている？ いったいなんのことを言っているのだ？

戸惑う啓史を見て、篩谷は意味ありげな笑みを浮かべる。

「ふふん、バレたら困ることがあるでしょう？ なんなら、大声で言っておきましょうか？」

眉をひそめる啓史を見て、篩谷は嬉しそうに笑みを歪めた。

その表情に胸がざわついた。まさか……だよな？

「篩谷先生、いったい何を言ってるんですか？」

金山は戸惑って、ふたりの間に入ってくる。

「佐原先生の結婚相手よ」

愉快そうな篩谷の言葉に、啓史の顔が強張る。

「わたしに目撃されるとも知らずに、ずいぶん仲のいいところ見せつけてくれたわね」  
まさか！ 篩谷は俺と沙帆子が一緒にいるところを目撃したというのか？

じわじわと不安が込み上げてくる。

「ええっ！ 篩谷先生、佐原先生の奥さんを見たんですか？」

篩谷は金山の言葉を無視して、さらに口を開く。

「あの場所に誰も寄りつかないと思ってるなら、大間違いよ」

篩谷は勝ち誇ったように宣言する。

啓史は頭をガツンと殴られたような衝撃を受けた。

もう疑いようがない。篩谷に、沙帆子と一緒にいるところを見られたのだ。

「うふふ……あはは、あーっはっはっは……」

篩谷は、それはもう楽しそうに笑い出した。

「あー、おかしい。佐原先生その顔、最高だわ！」

一気に血の気が引いていく。

最悪の事態が起こってしまった。しかもよりによって、バケ子女史にバレるなんて……  
くそっ、どうする？

沙帆子の笑顔が脳裏に浮かび、胸が引き裂かれそうになった。

「それじゃ、失礼しますわ」

意地の悪い笑みを浮かべ、篩谷が歩み去る。そのあとを追うこともできず、啓史はただ去って行く背中を見送った。

「あっ、篩谷先生、ちょっと待ってください。まだ話が……」

金山は戸惑うように篩谷と啓史を交互に見たが、最後には篩谷を追いかけて行った。  
なんてことだ！

沙帆子を守ってやるなんて大口を叩いておきながら……

自分に対する激しい怒りに、啓史は身を震わせた。

## 7 お祖母ちゃんには敵わない (沙帆子)

美枝子の運転する車に乗り、もうすぐアパートというところまでやって来た。

沙帆子は微妙に落ち着かなくなつて、もぞもぞと身体を動かす。すると、運転席の美枝子が声をかけてきた。

「そうそう。お祖母ちゃん、ふーちゃんから啓史君との一部始終を聞いたのよ」

一部始終？ それは、沙帆子と啓史の結婚に至る一部始終ということだろうか。

「作戦のすべてが裏目に出ちゃつたつて、ふーちゃん笑つてたわ」

作戦……裏目？ どういうことだろう？

「ふーちゃんが言うには、最初に啓史君へさーちゃんとの結婚話を持ち出したのは、啓史君の気持ちを試したただけだったんだつて。なのに、彼はその結婚話に食いついたんですつてね？」

沙帆子は、美美子が突然結婚話を持ち出したときのことを思い返してみた。

確か、ママが急に条件がどうかと佐原先生に詰め寄つて……そうしたら、先生が『わかりました』つて答えて……ああ、駄目だ。あの夜のこと、衝撃が強すぎてあんまり覚

えていない。

「で、次は初めてのお泊まり」

それつて、パパとママが引つ越し先へ家を探しに行っている間、わたしが佐原先生のところへ泊まらせてもらったときのことだろうけど……

「それがどうして裏目に出たつて話になるの？」

「だってその状況は、結婚したあとと同じでしょう？ ふたりは、結婚する前にさーちゃんにその状況を体験させたわけ。けど、さーちゃんはなんなくクリアしちゃつた」

「クリア？ わたし、そんなつもり、全然なかつたけど……」

「それこそがクリアということになるわね」

「そうなの？ よくわかんないけど」

「で、最後に雲隠れ」

はっ？ く、雲隠れ？

まったく意味がわからず、パチパチと瞬きしてしまふ。

「ふーちゃんにとっては、一番の大勝負だったみたいね」

「あのお祖母ちゃん、わたし、全然わかんないんだけど」

「玄関の下アに張り紙をしたつて言つてたわよ？」

「あっ！ う、うん。あつた」



ある日、学校から家に帰ってみると、家の玄関に張り紙がしてあったのだ。

《持ってなければ、大家に行け!》とだけ書かれた紙。

いったいなんだと思ったんだっけ……

「ふたりに何も告げず引っ越し先へ行ったんですってね。連絡が取れないように携帯電話の電源まで切って……さーちゃんを動揺させる作戦だったのに、ふーちゃんの方がイライラしたそうよ」

「そ、そうだったの？ あのととき、ふたりがちつとも帰って来ないから不安だったんだけど……ちようどテスト期間中で、先生にずっとテスト勉強させられてたの。佐原先生、すっごいスパルタでね、頭がパンクしそうになっちゃった」

「でも、そのおかげで成績が上がったんでしょ？」

「うっ……そうだけど……」

啓史のスパルタぶりを思い出し、沙帆子の顔が歪む。そんな彼女を見て、美枝子が笑った。

「まあそんな感じで、ふーちゃんの作戦はことごとく裏目に出たらしいわ。けど、少しずつ諦めもついたって」

「諦め？」

「ふーちゃんの作戦がどれも裏目に出たということは、さーちゃんが啓史君と結婚して

もちゃんとやっていけるってことの証明なのよ」

「そうなの？」

「そうよ。ふーちゃんとしては複雑だっただろうけど、諦めと同時に安心を手にしたわけよ」

つまり、ママとパパは、わたしの気づかないところで、わたしが結婚してもちゃんとやっていけるかどうか、色々な方法で試してくれていたんだ。

そういうえば以前にも、ママにそんなようなことを言われた。わたしと先生の覚悟を試すために、お泊まりの話を持ち出したとかって……あのとときはよくわからなかったけど、結婚後の状況を体験させることで、わたしがどんな反応をするか試してたんだ。

諦めと安心か……。本当は、ママもパパもわたしに引っ越し先へついて来てほしかったんだよね。なのになわたしは、自分の気持ちばかり優先しちゃってた。それって、滅茶苦茶親不孝だよな。

「ねえ、お祖母ちゃん。わたし、引っ越し先について行くべきだったのかな？」

「そうなってたら、ふたりは嬉しかったでしょうね。けど」

「け、けど？」

「そういうことじゃないのよ。ふーちゃんと幸弘さんにとっては、自分たちの望みが一番じゃないの。ふたりとも、さーちゃんにとって何が最善かを常に考えているわ。啓史

君と結婚することがさーちゃんの最善だと思えたから、ふたりは結婚に納得したの。さーちゃんがしあわせであることが、ふたりの一番の喜びなのよ」

美枝子の言葉は、沙帆子の心に重く響いた。  
もしかすると、お祖母ちゃん（ばあちゃん）がわたしを迎えに来てくれたのは、この話をするためだったんじゃないのかな？

「お祖母ちゃん。話してくれてありがとう」

胸に込み上げてくる思いに声を詰まらせつつ沙帆子が感謝を伝えると、美枝子は何も言わずに微笑んだ。

その微笑みに、涙がぼろりと零れる。沙帆子は涙を拭きながら笑みを返した。

「さあ、到着よ」

美枝子の明るい口調に、沙帆子は長年暮らしたアパートに目を向けた。

なんだかいろんな思いで胸がいつぱいになる。沙帆子は自分を落ち着けるように息を吐いた。そんな沙帆子を置いて、美枝子はさっと車から降りる。

ひとりで感傷に浸つてもいられず、沙帆子も車を降りた。

「さーちゃん、はい」

通学鞆を手にアパートを見上げていたら、目の前にレジ袋が差し出された。帰る途中

## 立ち読みサンプル はここまで

で買ってきたお昼ご飯のお弁当だ。今夜も外食する予定になっている。

「お祖母ちゃん、朝から働きづめで、もうお腹ペコペコよ」

「大丈夫？」

「お昼ご飯を食べれば疲れも吹っ飛びおわ。さあ、ふーちゃんが待ってるわよ！」

そう言つて、美枝子はさっさと歩き出す。祖母の元気のよさにつられて、沙帆子は笑いながらあとに続いた。

お祖母ちゃん、わたしがあまり落ち込まないように、わざと明るくしてくれてるんだよね。

その気遣いが嬉しくて、また涙が出そうになる。

部屋の呼び鈴を鳴らすと、「はい」という美美子の返事が聞こえて、アパートのドアが開いた。

「沙帆子、お帰り。お母さん、お弁当買って来てくれた？ もうお腹ペコペコよ」

「あらま。わたしたち親子ねえ」

美枝子はそう言つて笑い出す。

「幕の内弁当にしたわ。けど、ただの幕の内じゃなくて、豪華版よ」

「匂いを嗅ぐとよけいお腹が空くわね。さあ、お茶を淹れるわ。早く食べましょう」

美美子は沙帆子から弁当の入った袋を受け取り、美枝子と居間に戻っていく。